新生祭 見聞録

scene 2

＜メルウィブ・ブルーフィスウィン＞

※ このお話は「FinalFantasyXIV 新生エオルゼア」の世界観を元に書かれた二次創作です。苦手な方は閲覧を控えて頂けますよう、お願い致します。

新生祭 見聞録 Scene2 <メルウィブ・ブルーフィスウィン>

「聞け！　誇り高き海の民よ！　思い起こせ！　魂揺さぶる我らの旗を！」

大船の帆を張るような凛々しさで、前方やや高く右手を突き出した声の主。

リムサ・ロミンサを束ねる黒渦団の最高司令官―――
メルウィブ・ブルーフィスウィン提督

彼女は今、アドミラル・ブリッジの作戦指揮室にて演説を行っていた。
かの零災から5年、多くの者達が下を向いていた当時に比べ、今は数々の問題を抱えていても、それから目を背けずに復興の一途を辿っている。
今日は「新生祭」。皆が顔を上げ新たな問題に立ち向かうようになって早一年…。この大きな節目に、エオルゼアを代表する三大都市ーウルダハ、グリダニア、リムサ・ロミンサーは、これまでの復興を労うと共に、束の間の宴を催していた。
これからは復興ではなく、更なる発展へと向かって「新しく生まれ変わって」いかなければならない。そんな決意と覚悟を感じさせるメルウィブの魂ある演説だった。
掲げられた右手は大きく開かれ、まるでこれから始まる「未来」を掴もうとしているかのようだった。

「海洋と航海の神リムレーンに導かれ、かの災厄から復興に尽力してくれたリムサの民よ、そして我ら黒渦団に名を連ねてくれた冒険者たちに心から感謝いたす！　我々は一つ深紅の旗の下に生きる、刎頸の友である！」

声高に宣誓するメルウィブの下には多くの者たちがいた。その声に同調するかのように大きな歓声が沸きあがる。その声の中に、人のモノではない”鳴き声”が紛れていることに、メルウィブは未だ気づかずに…。
それはまだ遠い…、遠い過去からの帰還。メルウィブの耳に邂逅の汽笛が響くのは、「勝利の勝鬨」が轟くのは、もう少しだった。

「不可能は人が作り出すもの。そして……可能もまた、人が作り出すもの。我々は飽くなき航海の果てに、必ずや勝利を手にする。かつて絶望の淵に立たされた航海もあった…。しかし！　この新生の刻を迎えられたのは、復興を掲げ、共に苦しい航路を渡りきった我々の勝利だ！」

　メルウィブが天高く右手を掲げた。そしてもう一度、大きな歓声が沸き上がる。
　しかし、メルウィブはその右手を、拳を力強く握ることが出来なかった。掴みたかった未来は、本当の勝利を分かち合いたかった相棒は、もうこの世にはいない…。多くの犠牲の上に、そして何よりも大切な相棒の死が、今もメルウィブの心の片隅に残っていたのだろう。
　自らの演説に沸く大歓声とは裏腹に、メルウィブの表情は勝利を喜ぶものには見えなかった。
　それは時間にしておよそ数秒かもしれない、視線を虚空へ彷徨わせた時には、すでに次の言葉を発する為に毅然とした表情に戻っていた。

「―――！　―――ッ！」

　どこからか声が聞こえる―――。
　それは人の言葉ではない。でも、誰かが誰かを呼んでいる……そう感じてもおかしくはない響きを含んでいた。
　まるでそれは、再会を知らせる「汽笛」のようでもあった。
　会場の誰もが、何か声が聞こえる――そう思った矢先、ドンッ！と大きな音がして突然入り口のドアが開かれた。
　何事だッ！　と、メルウィブが声を出そうとした瞬間、その来訪者に閉口する。一人の男と、一羽のチョコボの姿がそこにはあった。

「……かの霊災より、奪還…。任務、完了です」
　男は片膝を付き、メルウィブに頭を垂れる。扉を開け放って着地する

までの間、風が吹いたかのような身軽さで指揮室の中央に舞い降りていた。
男は頭に装飾の施されたバンダナを巻き、全身を緑を基調とした軽装を纏っている。腰の両脇に携えた小刀は紛れもなく、二振り一対の「双剣」を得物とする双剣士そのものだった。
男の名はジャック。リムサ・ロミンサを裏から支える双剣士ギルドのマスターである。
気が付けばいつの間にか、両サイドに側近のミコッテ族の女性ヴァ・ケビと、ララフェル族のペリム・ハリウムの姿もあった。二人は今回の主役の花道を作るかのように、周囲の人々を密かに誘導していたようだ。
お陰で誰も下敷きにはならず、さらにはメルウィブと主役を一直線に結ぶ「花道」を演出している。

「なぜ……」

メルウィブは驚愕の表情を浮かべ、信じられないといった口調で一歩歩み出る。その足取りは普段の毅然とした態度からは到底想像出来ないくらい、覚束ないものだった。
そう、文字通り「幽霊でも見るかのような」反応だ。ただ、恐怖で一歩後ずさるのではなく、前に踏み出したのは少なからずの「期待」が上回ったのだろう。

「お前は、あの時……死んだはずでは……」

無理もない。信頼を寄せる大甲将エインザル・スラフィルシンの口から愛チョコボ「ヴィクトリー号」は絶命したと聞いていたからだ。
もちろん、エインザルは嘘を言っていない。ましてや、生きていることをあえて伏せたわけでもなかった。ヴィクトリー号はあの時、確かに絶命している。
では、ここにいるチョコボは生き写しなのか？　それとも本当に足の

付いた幽霊なのか？　はたまた、よく似たデストリア種なのか…。
　だが、心から愛でた相棒をメルウィブが見間違えるはずがない。似ている程度なら、その戦況をも見通す鋭い眼光で見抜いているだろう。

「その瞳の色…恐怖を識っている目だ。本当に、ヴィクトリー号……お前なのか……？」

　そう、同じデストリア種でも、体格に優れたチョコボでも、ましてや戦場を力強く駆け抜ける逞しい脚といった情報で、メルウィブは相棒を見間違えはしない。
　その奥深い瞳を、メルウィブは見通す。
”恐怖を識る者の目”……それはすなわち、臆病者ではない。
　恐怖を知らぬ者が持つ勇気など、ただの蛮勇に過ぎない。死と隣合わせである恐怖を知っているからこそ、真に「死ねない」という覚悟を瞳に宿すことが出来る。
　それは転じて、勝利への渇望。だからこそメルウィブは「彼女」を、相棒として選んだのだった。

「提督、あの日の真実をお話します……」

　後ろに控えていたエインザルが重い口を開く。
　彼でさえ、ヴィクトリー号にまつわる真実を知ったのは、つい先程の事。ジャックからもたらされた情報により、すべてが繋がったのだった。

　遡ること数時間前―――。
　リムサ・ロミンサ某所にて。そこには、エインザルとジャックの姿があった。将校とその配下、という雰囲気ではなく旧知の仲といった方がまだ近いかもしれない。

表向きは大甲将と双剣士ギルドのマスターだが、二人の間には別の何かが関係しているようにも見える。
なぜなら二人は親しげに談笑しているわけではなく、視線は鋭いままで、何かを警戒しているようにも見えるからだ。
とはいえ、一触即発とも違う。そんな不思議な距離感を感じさせる。

「諜報活動なんていつ振りだったろうな。ま、少しは楽しめたぜ」
「成果は？」
「一つ、”雛の件”は万事順調、予定通りだ。二つ、”業の件”はアンタが睨んだ通りだった。三つ、”政の件”は…俺たちのやり方とは違うんだが、まぁ、あいつらもノリ気だったんで問題ない」
「うむ、順番に詳細を聞こう」

雛、業、政…これらはすべて隠語なのはいうまでもない。
本来、双剣士ギルドが担う依頼というのは、掟破りに制裁を下す為のものが多い。ゆえに、国内外問わず諜報活動のみを行うのは、ギルドとしてではなくエインザル個人の要望が強かったようだ。
とはいえ、ジャックは職業柄、諜報活動にしても情報源の秘匿はもちろん、内部情報の漏洩などには特に注意している。

「”雛”は当時、絶望的だった。それはアンタも確認している。だからあの時の判断は決して間違っちゃいなかったと思うぜ。ただ、幸運だったのはグリダニア党首のカヌエ様の目に留まったことだ。あの方の治癒力は並大抵のモノじゃねぇ…。まぁこれは追々話すが、もう一つ幸運が重なっていた。ヴィクトリー号のお腹には新しい命が宿っていた。母親としての最期の役目を務め果せたんだ…。致命傷を身に受けながらも、お腹だけは守りきった、感服するぜ…」

あの日、帝国兵の放った弾丸は装甲を貫いた。その威力は身体に致命傷を与えるものとなったのはエインザルも知っている。

だが、ヴィクトリー号のお腹に小さな小さな命が生まれていたことを
エインザルは知らなかったのだ。提督の愛チョコボを放置するわけにはいかず、
本部まで運んだその亡骸を、折を見て弔おうと考えていた。
その時、撤退の指示を終え自らも戦場を離れようとしていたカヌ・エが、
ヴィクトリー号の小さな命のことを看破する。
そして、この亡骸は引き取ると申し出てくれたのだ。

**「あの時は撤退最優先だった。一人でも多くの者を生きて帰らせることが
何よりも重要だった。だから、カヌ・エ様がヴィクトリー号を引き取ると
言った時、深く追求せず応じたのだ。まさか新しい命が宿っていたなんて
考えもしなかったからな」**

そして、もう息を引き取っていたヴィクトリー号を見送り、メルウィブには
”絶命した”と報告をしたのだった。

**「当時、お腹の命もヤバかったのかもしれない。でも、カヌ・エ様は魂を繋ぎ
止めた――。そしてグリダニアで、今日まで育ててくれた。先日俺が行った
時には、ピンピンしてたぜ。もう立派な顔立ちだった」**

ヴィクトリー号のお腹には雛がいた。その魂を繋ぎ止め。6年の歳月を掛けて
立派に育っていたのだ。グリダニアの自然豊かな森、黒衣森のベントブランチ
牧場で密かに……。
ヴィクトリー号の子供…それは言い換えるなら、世代を経て生まれ変わった
といえるのかもしれない。この新生の刻に――。

**「本当にあの方には恐れ入る。感謝の言葉しかないな……」
「そいつぁ、次会ったときに直接言ってやんな。ついでに牧場で世話をして
くれていた、チョコボのニオイがするお譲ちゃんにもな」**

そういってジャックは、チョコボの羽ばたく真似をする。クエクエ。

「……次の話に移ろう。そのカヌ・エ様の”魂を繋ぎ止めた方法”……やはりエーテルとは違うのか？」
「あぁ。幻術は本来、自分の周りにあるエーテルを集め、形を与えることで魔法を紡ぐとされてる。でも、その魔法の源はエーテルじゃなく自分の内側から紡がれる力によるものらしい。その意味では呪術に近いものかもしれねぇな。ただ、呪術も自身のエーテル力を根源としてることを考えると、根源の力が異なる。だから、呪術とも違う」
「内側から紡がれる力……とは、一体何なのだ？」
「”輝力”と呼ばれるものらしい。魂の蘇生術は云わば、禁忌に近い。気力回復、肉体活性よりもさらに上……秘術に近い領域だな。そいつを操れるのは今のところカヌ・エ様ただ一人。角尊サマの成せる技なのかは分からねぇが……。守りたい、救いたい、その魂を揺さぶる程の想いが昇華された魂の蘇生術。名を【リレイズリィ】だそうだ」
「輝力を根源とする秘術、リレイズリィ……。やはりあの御方も……」

カヌ・エの使役する力、輝力。それはエーテルとは異なっていた。
一介の幻術士、白魔道士が使える領域のものでないのは明白……。
ゆえに、党首の座に就いているとも云えるだろう。

「ま、伝え聞いた話だ。実際に見たわけじゃねぇからな、肝心な所はわからねぇ。噂だと、冒険者の使うリミットブレイクに勝るとも劣らねぇ程のシロモノなんだとさ」
「そんな能力を三国の党首が持っていてもおかしくはないか…。国の党首は権力者である以前に、有能者でもある。もちろん提督も今の座を築き上げたのには実力があったからさ。お前も聞いたことがあるだろう？　大海をうねる大津波のように二丁の拳銃から縦横無尽に弾丸を浴びせ掛ける神速のファストドロウ【ポルトランチャート】。まぁ、提督の場合はその尋常なまでの

”意志力”が成せる技だけどな」

　メルウィブが海賊時代、数々の伝説を築き上げてきた背景には実力をもって証明してきたものばかりだ。
　今でこそ、指揮官としてのポストに落ち着いているが、前線へ出た時のメルウィブと船上で出会った者は、その轟音とも呼べるの銃声が3日3晩耳から離れないという……。
　となれば、残すウルダハの不滅隊局長ラウバーンの能力とは……。

「と、同時にウルダハの有能者ラウバーン局長もすげぇヤツだ……。アラミゴの猛牛がコロセウムで勝ち続け、英雄とまで謳われ、今ではウルダハの代表を担うほどになった。局長がそこまで勝ち残れたのには理由がある。死闘の中でラーニング能力を開花させ、多くの相手をねじ伏せていった。そのラーニングの果てに辿り付いた強大な神剣――【ブレイブハート】を開眼させたからだ。これは局長が死闘の末に手に入れた力さ。誰にも真似できないだろうな。まさに”業力”の成せる技。聞くところによると、ラウバーン局長は”青魔道士”じゃねぇかって噂だ」

「……それが、三国の党首たる所以でもある。一国一城を統べるには3つの力が必要なのだ。権力、財力、そして…暴力。勇将の下に弱卒なし。俺はそう思っている」
「言うねぇ。アンタらしい信念だ。伝説の海賊王…霧髭サン?」
「……その男は海に消えた。俺はエインザル大甲将さ」
「ま、その暴力とやらが強制力じゃねぇってことを祈ってるぜ。せめて、抑止力ってところに収まって欲しいもんだ」

　エインザルとジャックは視線を合わせず、口元だけ笑って見せた。
エインザルは水平線を、ジャックは空の彼方を見やる。
　二人が見つめる先は、背中を合わせることはあっても、向き合い同じ未来

ではないことを物語っているようだった。
「最後だ。やり方は任せるが”まつりごと”はサプライズが華。そして、この機をおいて他にはない。新生祭に相応しい催しとなろう」
「本来、俺らが受ける仕事じゃねぇが、ま、アンタの顔も立てなきゃな。ヴァ・ケビも、ペリム・ハリウムもノリ気だ。あとはアイツ次第だな」
「くれぐれも、タイミングは計ってくれよ。それからモノは壊すな。今回はあくまでも、主役は雛だ」
「細けぇこたぁいいんだよ。万事、つつがなくエスコートしてやるよ。アンタこそ、”事後処理”は頼んだぜ」

お互いに憎まれ口を叩けるような関係で、だけれども親しい友とは違う。志や目指す方向は一緒でも、決して交わることがない二人の未来。
そんな不思議な関係の二人。彼らの視線の先には、何が映るのか――。
それはきっと、道は違えどそれぞれがリムサ・ロミンサを生きる人々がこれからの新生の時代を謳歌していることを願うものなのだろう……。
そして、木の葉が揺れる程度の風が吹き、ジャックの姿は消えた。

――――。
――――――。

「そうか、ヴィクトリー号の……」

メルウィブはかつての相棒の面影を、”雛”に見る。でもそれは当然と言えた。実の子である雛が同じ瞳をしていたとしてもおかしくはない。
ヴィクトリー号と同じ”恐怖を識る目”を宿しているのはグリダニアでの生活の影響か、カヌ・エの力によるものかは定かでは無いが、親子で瓜二つという次元を超えて、メルウィブには新しく生まれ変わったとさえ感じさせていたのだ。

「提督、この子の名付け親になってはくれませんかね」

エインザルは雛を見やり、メルウィブを促す。雛はその大きな身体を誇示するかのように堂々とした佇まいで、メルウィブを見上げた。

互いの間を遮るものはなく、雛とメルウィブの視線が交わるとき、黒渦団の最高司令官は、一つ笑み、そしてまた力強く右手をかざす。

「よくぞ戻った、ヴィクトリー号よ！　これは栄光の帰還である！
よってそなたに「グローリー」の名を与える！　皆の者、勝鬨を上げよ！
グローリー号の勇姿を目に焼きつけよ！　これからの新生の時代を、
勇敢なる友の為に、己の正義の為に、栄光の勝利を掴む時代にするのだ！」

メルウィブは克己した。　新しい命の歓迎を、かつての友に捧ぐ。

人々の歓声はメルウィブの耳に心地よい追い風となって届いた。きっと、これからの時代をより良いものしたいという、心の表れだろう。
それは希望かもしれない、嘆願かもしれない、もしくは未来への意思かもしれない。いずれにしても、リムサ・ロミンサの民はまた新たに、新生の時代へと出航する。
この航海の果てに望むのは、己が信じた未来があるのみ。
メルウィブは言う…”不可能は人が作り出す”。敗北は受け入れよう、されど、諦めはしない意思の力は栄光の未来を紡ぎ出す。
それはまるで、第七霊災から立ち直ったエオルゼアのようではないか。

救えなかった命を悼み、新しい命の歓迎を。
勇敢に戦って敗北した大戦を胸に、次こそは勝利を掴む意思を。
未来は、己の手で掴む……それを体現しているようだった。
メルウィブ自身、先ほどは握れなかった拳が、ふとして握られているのに気づいた時、口元に笑みを浮かべ目を伏せた。
ようやく迷いは消えたのだろう。その表情から伺える。

「…式典の催しにしては、サプライズが過ぎるぞ。エインザルよ」
「派手なヤツです。俺はもう少しスマートな演出を期待したんですがね」

気がつけば、ジャックたちの姿は消えていた。
残るのは雛…グローリー号と、未だ興奮醒めやらぬ人々。メルウィブはグローリー号に駆け寄ると、手綱をぎゅっと握り締め、それから温もりを確かめるように雛の身体を、そっと抱き締めるのだった……。

一方、”派手な演出家たち”は———。

「ジャック、やっぱりアタシは、あんな登場の仕方は双剣士としてどーかと思うよ？」

「俺らのやり方じゃねぇのは確かだ。アイツが興奮しちまってしょうが無かったんだ。でもたまには、ドンパチ派手に登場するのも悪くねぇな」
「それではミリララさんと同じですよ、ジャック……」

屋外に出ていた3人は、一仕事終えたとばかりに演説会場を遠目に見ていた。ミリララとは、ジャックいわく”イエロージャケットの派手女”である。

「けどな、”不当に奪われた品”を奪還する。それは俺達の仕事だ。分かってるな？」
「いや、命や魂は無理ですよ」
「カヌ・エ様じゃあるまいし……」
「細けぇこたぁいいんだよ。人だろうとチョコボだろうと、仲間の忘れ形見とあっちゃ放っておけねぇだろ。そいつの未来を奪われたなら、取り戻してやるさ」

曰く、人の「未来」を奪うべからず。
曰く―――”不当に奪われた未来”を奪還すべし。

転じて、自身の未来は己の手で掴み取れ――ということ。
光が差す場所には、必ず影が落ちる。掟も、その表と裏が存在するのと同じように、未来もまた「掴む者」と「奪う者」がいる。
それはまるで、水平線を境に隔てる大空と大海原のようでもあった。
エインザルとジャックの視線の先に”別の未来”が映っていたように――。
これからの新生の時代、空へ飛び立つか、海へ漕ぎ出すかは……
エオルゼアに降り立った冒険者の…あなたの手に委ねられている。

エオルゼアの描く未来を、あなたは冒険の途中で耳にするだろう。
自身の未来を掴む、長い長い人生（航海）の中で―――。

Scene 2 Merlwyb Bloefhiswyn...end.

～あとがき～

こんばんわ、ユーラです。
新生祭見聞録 Scene2〈メルウィブ・ブルーフィスウィン〉を最後まで読んで下さってありがとうございました。

この作品は、公式イベント「新生 FFXIV キャプションコンテスト」用に執筆した【新生祭言行録】と同じシリーズの作品です。
当初から、新生祭言行録は3パートに分けて執筆しようと考えていました。
ですが、Scene2(今作)を書いているときに、全部同じにして統一するのもいいけどもう少し変化が欲しいなぁと思ってしまって、いっそのこと今回は一人称やめよう！パート毎にテーマもコンセプトも変えちゃおう！　というノリです(笑)
なので、一人称じゃないなら言行録もやめて、【見聞録】にしました。

語り部の雰囲気が全然違いますよね。メルウィブの一人称ではないので、少し他人行儀な、一歩引いて物事を考えているような、そんなイメージ。
見聞録でありそうな結び方で余韻を持たせてみましたが、いかがでしたか？

ただ、少し補足的なことを入れてしまったので完全な三人称ではないですが、言行録では「朗読しているような」イメージだったのに対して、見聞録は「読み聞かせてもらっているような」イメージ。そういう雰囲気を感じてもらえたら幸いです。
あと、裏のテーマをここで暴露してしまうと「言行録⇒過去」「見聞録⇒未来」
じゃあ最後に来るのは「現在」ですが、はてさて…何録になるでしょうか…。

また、例によって1周年イベントで公開中の「第七霊災回顧録」を参考にさせて頂いています。提督のエピソードは、「栄光のヴィクトリー号」ですね。
勝手に真実を語っちゃってますし、公式で発表されていない設定まで妄想していますので、その辺ご理解のほどよろしくお願いします(笑)

いやホント、想像ですからね？　三国の党首が固有LB的なものを持ってるとか、ヴィクトリー号に子供がいたとか、ジャックがミリララスタイルに目覚めたとか、すべてユーラの妄想ですのであしからず…。

ちょっとしたスパイス的な、物語の”変り種”としてアリかな？　と思ってもらえれば幸いかなぁと思ってます。

それでは、長くなりましたがこの作品はリンクフリーです。

気に入って頂けたら紹介して下さると、なお嬉しいです。
どちらから読んでも大丈夫ですが、まだ言行録を読んでないよーという方は、ぜひ下記リンクより読んでみてくださいね。

【新生祭 言行録】　【新生祭 近思録】

ご意見・ご感想はこちらよりどうぞ。
ただし、公式様より注意があった場合は即刻掲載を中止しますので、リンクが切れていたら、そうなったんだな・・・と思ってくださいね。

次は、ラウバーンを取り巻くお話ですね。キーワードは「現在」！　乞うご期待！
実はこの後、公式の「ファンアートコンテスト」にもエントリーしようと思ってますので締め切りが12/4と、もう目前！　これが終わり次第Scene3に着手します。

楽しみにお待ちください！　機会があったらファンアートコンテスト用の作品もどこかでお披露目します～。

改めまして、1周年おめでとうございます！

まだまだ終わらない、14の年！

...Yuura.Erisell.(Rumuh) 2014.11.21 Fri.

新生祭見聞録 Scene2

〈メルウィブ・ブルーフィスウィン〉

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2014 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

この作品の掲載は、スクウェア・エニックス様より忠告があった場合
即刻掲載を取り下げることをお約束します。